



英 文 学 会 通 信

第121号

— 日本大学英文学会 —



発行：日本大学英文学会

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部英文学研究室内

Tel. : 03-5317-9709

E-mail : esanu02@gmail.com

《ご挨拶》

- 会長あいさつ 日本大学英文学会会長 吉良 文孝 2
 令和6年度を迎えて 日本大学文理学部英文学科主任 塚本 聡 3

《エッセイ》

- “All is well that ends well.” 日本大学文理学部英文学科卒業生 内田 慶 4
 自分が輝けるものを見つける 日本大学文理学部英文学科卒業生 吉永 陽菜 4
 Ambitiousに学生生活を過ごす 日本大学大学院博士前期課程修了生 荻野 菜加 5
 博士前期課程修了までを振り返って 日本大学大学院博士後期課程1年 柏木いずみ 6
 日々進化するAIの一步先へ～博士論文を書き終えて～
 日本大学文理学部助手 村岡宗一郎 6
 セブ語学留学の可能性について考える 日本大学スポーツ科学部准教授 秋葉 倫史 7
 令和4年度海外派遣研究員を終えて 日本大学スポーツ科学部准教授 田中 竹史 8

《海外留学体験記》

- 挑戦する勇氣 日本大学大学院博士前期課程1年 秋谷 仁那 10

《研究室だより》

- 2023年度(令和5年度)行事 12
 2024年度(令和6年度)行事 13

《事務局だより》

- 月例会報告 13
 2023・2024年度運営委員 14
 日本大学英文学会2022年度決算額 14
 お知らせ 15

《ご挨拶》

日本大学英文学科(学会)に
育てられて

日本大学英文学会会長 吉良 文孝

英文学会会員の皆様、こんにちは。

会長としての挨拶文はこれが最後となります。申し合わせ規定により再任はありませんので、ひと区切りとしまして感謝の気持ちも含めご挨拶申し上げます。

本「学会通信」の昨年度春号(第119号)で言及しましたとおり、2年後の2026年には英文学科(学会)創設100周年を迎えることとなります。区切りのよい100周年ということですから、学科をあげての盛大な記念行事が開催されることを願っております。学会員の皆様からは、記念行事開催に向けてのお知恵をいろいろと拝借することになろうかと思えます。その際はどうかよろしく願い申し上げます。

この10年ほどでしょうか、何とかならないものと心配しておりました学会機関誌『英文学論叢』も、直近の『英文学論叢』(第72巻)は自立するほどの厚さになりました。機関誌をより充実したものにするために編集委員会にもいろいろな方策をお願いしておりましたが、シンポジウム論文や書評論文の掲載など、いろいろな妙案を練っていただいています。今後は、研究会員の皆様のさらなる活発な研究活動(論文投稿)を期待しております(私が助手の頃は、何年も連続して『英文学論叢』に論文投稿したものです)。

本年度の研究活動も活発です。先の特別講演では、町田章(あきら)先生(法学部准教授)をお迎えし、「英語学徒は生成AIとどう向き合うのか?—認知言語学からの提案—」と題してご講演いただきました(しかしそれにしても、生成AIの登場により、学生に課すレポートはもちろんのこと、学会の研究活動においても、その研究手法や研究の中身そのものが問われるという大変な時代となりました。今後、「機械」がどのような方向に進むのかは未知なところがあります。しかし、2010: *The Year We Make Contact* (映画『2010年宇宙の旅』)に出てくる人工知能 HAL 9000 (当時、コンピュータと言えば、IBM。それよりも1歩先んじた知能ということで、アルファベットの1文字前をとって HAL と命名) のような暴走があるにしても、最後は「人間」がおさめるのではないかと私は思っています。話が横道に逸れました)。また、6月には牧野理英先生を世話役として「アメリカ文学シンポジウム」、10月には保坂道雄先生を世話役として「英語学

シンポジウム」が開催されます(詳細については学会HPにある「月例会」案内をご覧ください)。そして、12月の年次大会。コロナ禍も終息し、本年度の年次大会のあとには「懇親会」を予定しています。学内での(アルコールを提供する)懇親会の開催が解禁となりました。会員同士、そして先生方を交えた積る話をお楽しみください。

この3月の卒業式の会長挨拶でもお話ししたのですが、昨年、私の大学時代のサークルの後輩たち(女性数人で、なかには英国在住の後輩もいました)が、40年は経つでしょうか、大学に遊びに来てくれました(歳をとると大学を懐かしく思うようになるものです!)。同じく、彼女たちにとってのサークルの先輩である保坂道雄先生が、当時とはすっかり様変わりした文理キャンパスをひとしきり案内していただきました。言うまでもなく、そのあと、われわれは、当時もよく足を運んだ日大通りの交番前の居酒屋で昔話に花を咲かせました。お店には遅れて男性後輩も加わりましたが、誰一人として姿かたち、話し方は変わっていないのです。皆、当時のままです。まるでタイムスリップでもしたかのように。卒業後、大学がずっとそんな場所を提供できたらなあ、と後輩たちの笑顔を見てつくづくそう思いました。

縁あって、私が日本大学入学のために上京してから半世紀近くになります。身体のごことを切っても「日本大学の血」が流れ出てくるほどに、私には日本大学に対する自負心があります。日本大学には本当にお世話になりました。本誌既刊号でも触れましたが、学生会員としての会員数が風前の灯火です。現在、学生会員は4学年合わせても20数人です。上に触れたとおり、帰る場所があるというのはいいものです。2年後には学科(学会)創設100周年を迎えます。どうか皆さん、一人でも多くの在校生が「学生会員」となり、そして卒業後と同時に「同窓会員」となって学会を支えていってください。輝かしい100年の伝統も一瞬にしてなくなってしまいます。伝統を維持するためには100年の努力が必要となります。伝統を守るのはわれわれの使命でもあります。ひとりでも多くの皆さんが「学生・同窓」会員となり、わが日本大学英文学会を盛り上げ支えていってください。それが叶えば、それはもう私の望外の喜びです。

令和 6 年度を迎えて

多彩な知見を持つ学生が卒業していくことを願っています。

日本大学文理学部英文学科主任 塚本 聡

4月より、前任飯田啓治朗先生の跡を継ぎ、英文学科主任となった塚本聡です。よろしくお願いたします。

今年、文理学部英文学科には1年生143名、日本大学大学院文学研究科英文学専攻には前期課程院生6名、後期課程院生2名が入学しました。種々の事件の後でしたので、志願者数を心配する場面もありましたが、例年と変わらない入学者を迎えることができました。とりわけ大学院は近年進学者が少ないことが多く、寂しさを感じさせる時期が続きましたが、本年は多くの進学者があり、活発な議論が交わされるかと思ひ、喜ばしい限りです。

英文学科の教職員の変動についてご報告いたします。昨年度の年次大会において最終講義が行われましたが、長年アメリカ文学を研究されてきた高橋利明先生が昨年度末に定年を迎え、本年度4月からは特任教授として継続して研究・教育に携われることになりました。2022年度より任期制職員としてお勤めの渡邊慶華さんが退職されました。教員16名、任期制職員及び派遣職員3名総勢19名にて英文学科が運営されています。

本年度からほぼ完全な対面授業となり、かつてと変わらない日常が戻ってきています。一方で大きく変わろうとしていることがあります。文理学部では来年令和7年度に向け、カリキュラム改定を行いました。最大の改定点は副専攻制を導入することです。既存の専攻（本学科の場合には英文学科の授業）を修了することに加え、希望する学生は他の学科の提供する指定科目を履修することにより、卒業時に当該専攻の履修証明が得られるというものです。この制度導入の目的は学際的な学修を活発化するという側面もあるでしょう。文理学部はすでに「文理融合」として、学科横断的な学修を目指してきましたが、現実問題として履修条件等の制約から他学科の専門科目を履修するにはハードルがあったことも事実です。今回この「文理融合」をより実現しやすい形として副専攻制を導入するに至りました。各学科から1つまたは2つ、学科横断的に5つ、計24の副専攻が設定され、多彩な学修が容易にできるよう工夫されています。社会に求められていることはより多様となり、その変化に対応する人材の輩出も大学に求められた使命です。副専攻という制度により、より広範な学修につなげることを目指しています。

この改定が実を結ぶかどうかは、数年後の判断となりますが、より魅力的な学修環境を提供することで、



《エッセイ》

“All is well that ends well.”

日本大学文理学部英文学科卒業生 内田 慶

“All is well that ends well.”これは日本語で言う「終わり良ければすべてよし」を表現する言葉ですが、私の大学生活を一言で表すのならば、この言葉に尽きます。コロナ禍で始まった大学生活は、期待していた通りではなく様々な困難がありました。だからこそ学べたことも多く、貴重な時間でした。大学生になった当初は現状に悲観的になることもありましたが、結果的に大変実りある充実した4年間となり、大変感謝しております。

今思い返せば、入学式も開催されず、オンライン授業という慣れない環境に戸惑い、不安を感じながら過ごした期間は、自分自身を見つめなおし、自ら行動することの大切さを実感できた大変貴重なものでした。大学1・2年生の頃は友人もいない中、部屋の中で一人孤独に授業を受けることがなにより辛かったことを覚えています。しかし今考えてみれば、そのような環境だったからこそ大学内外での課外活動等に積極的に参加し人脈を広げようと行動したり、資格取得や運動習慣を身につけたりと、実際に大学に通っていたら実現できなかったかもしれないことにも挑戦することができたと思います。

大学3年生になり、やっと憧れていた普通の大学生活を送ることができるようになってからは、仲間の大切さを何より実感することができました。今までより早く起きて通学するという環境の変化に最初は戸惑いでしたが、これまでオンライン授業で画面越しに顔を見ていた友人たちとは、会ってすぐに打ち解けることができ大変安堵したことを覚えています。授業の予習や課題を話し合いながら取り組んだり、学内で一緒にランチをしたりと大学生の当たり前前日常がとても新鮮で、大変楽しい時間でした。

また、就職活動や教員採用試験に向けた情報交換をできたことは、進路に迷っていた私にとっては大変貴重でした。民間企業と教員はどちらの道も私にとっては大変魅力的であったため、友人や教授、また就職サポートセンターと教職センターの方々から頂いたアドバイスを参考にしながら、どちらも並行して進めることに決めました。3年生の3月から就職活動が解禁され、それから6月の教育実習、7月の教員採用試験と目まぐるしい毎日でしたが、友人と支え合いながら1つ1つ全力で取り組みました。どうなるか分からない進路に不安を感じることもありましたが、ともに頑張

る仲間の存在のありがたみを感じることができた期間でした。結果として、どちらも志望する進路の実現が叶いましたが、最終的にもともと志していた教員への道を選択することに決めました。これまで私を支えて、応援してくれた周りの方々に深く感謝するとともに、今後は多くの生徒に良い影響を与えられる教員になれるよう精進していきたいです。

この4年間で、辛いことも苦しいことも、最終的には良い思い出となることを学びました。今後の人生においては、様々な困難があるかもしれませんが、「ローマは一日にして成らず」という言葉のように、常に継続して努力をすることを肝に銘じて教員生活を送っていきたいと思います。そして最後になりますが、日本大学には、尊敬する先生方や先輩方がたくさんいます。高校時代から日本大学でお世話になった私にとっては、この大学を卒業することができたことを心から誇りに思います。



自分が輝けるものを見つける

日本大学文理学部英文学科卒業生 吉永 陽菜

人には、苦手なこと、得意なことが必ずあると思います。「英文学科生なのに」と思われてしまうかもしれませんが、私にとって英語は得意科目ではなく寧ろ苦手な科目でした。特に、スピーキングやリスニングが不得意だったため、オールイングリッシュの授業には大変苦勞しました。努力したこともあり、授業においては良い成績を取ることはできました。しかし、4年間で根本的なスピーキングやリスニングが苦手というところの解決までには至りませんでした。

それでも、私は自分の好きな分野、得意な分野では力を十分に発揮することができていたと思います。例えば、私はリスニングやスピーキングが苦手でも、文学作品を読み、考察し、レポートを書くといった課題では高い評価をつけて頂くことが多くありました。特に、文学作品の時代背景とストーリーを結びつけて考察することが好きでした。そのため、この得意分野を卒業論文に上手く取り入れて執筆することにしました。これを読んでいる人の多くが、卒業論文は辛いもの、大変なものだというイメージを持っているのではないのでしょうか。私も書くまではそのように考えていました。しかし、書き始めると30枚もの卒業論文をあっという間に書き終えることができました。これに加え、指導教員の先生からも良い評価をつけて頂くことができました。

人間、好きなものや得意なものには夢中になって取り組むことができるものです。苦手克服はもちろん大切なことですが、自分の好きや得意を伸ばしていくことにも目を向けてみてください。苦手な分野で輝くことができなくても、自分が輝くことができるものは必ずあります。自分が何が得意なのか、好きなのかというのを発見するためには、自分を客観的に見ることや他者に評価を求めることも有効的だと思います。また、自分が直感的に「これがやりたい!」と思う感覚も大切にしてみてください。そうすることで、自分の好きや得意に気づくことができると思います。そして、好きなことを頑張っている時の自分の成長の速さに驚きや楽しさを感じると思います。

このエッセイを読んでいる人の中には、苦手な分野の中で頑張っている人や焦りや不安を感じている人もいるかもしれません。出来ないことがあるのは当然のことです。大学生という期間は、自分と向き合い、自分自身を知ることができるとても貴重な期間だと私は考えています。だからこそ、この貴重な期間に苦手克服だけではなく、自分が輝けるものを見つけてみてください。勉強以外の自分が好きなことでも良いと思います。私の周りには、塾講師としてアルバイトを極めた人、交友関係の輪を広げて友人と趣味を極めていた人がいました。大学に通う人の中には、大学の勉強に注力する人、交友関係の幅を広めるために大学に通う人、インターンやバイトといった社会勉強に力を注ぐ人など様々な人がいます。4年間を通して「これを極めた! 頑張った!」と言えるようなものを見つけてみてください。それだけでも、意義ある大学生活が送れると思います。結びに、皆さんの大学生活が実りのあるものになりますよう願っております。



Ambitious に学生生活を過ごす

日本大学大学院博士前期課程修了生 荻野 菜加

学部生の3、4年生の時にコロナ禍を経験し制限されたことも多かった為、私は大学院での学生生活は何事にもチャレンジをしました。自分の専門の学業以外では、特に様々な国籍の方や専門分野を研究する方と交流することを目標に持ちました。

まず、文理学部で行われている英会話サロンやEラウンジ、海外の大学との交流会や特別講義に沢山参加してきました。ハワイ大学、ワシントン大学、マリボル大学、ダラム大学などのオンラインの交流イベントや特別講義、テンブル大学日本キャンパスのフェイス

ブックでの授業や対面授業に実際に参加しました。イベントや講義の内容が自分の専門分野でないと参加するのをためらう方も多いかもしれませんが、とりえず参加をしてみることが大切です。時には理系のイベントにも参加をしました。国際数学オリンピックのボランティアで8日間スウェーデンの学生が日本で生活するのを助ける活動や、インドネシアの Sepuluh Nopember Institute of Technology での gPBL (global Project Based Learning) に参加し、芝浦工業大学の理工系の方の為のシンポジウムである GTI コンソーシアムで gPBL での経験を発表する経験もしました。特に、インドネシアでの gPBL は難しい挑戦でした。プログラムは、実際にインドネシアへ行き、スラバヤ市での環境問題についてインドネシアの学生と議論し、最後には企業や教授に向けてプレゼンテーションを行うものでした。企業や政府機関が、エネルギーや街の環境に関する講義をして下さったのですが、特に科学的な話になると聞きなれない単語ばかりが並び、理解するのは大変でした。また、プレゼンテーションをグループで作成し大勢の方に発表する経験があまりなかったため戸惑うこともありましたが、そこでのクラスメイトとの関りや文化を知れたことがとても良い経験になりました。これらのイベントによって、様々な分野から見る柔軟な視点や、言語、文化や学問を学ぶことができました。それだけではなく、自分と同じように国際交流に興味のある様々な国籍の友達を作ることができ、積極的な性格になり行動力がついたことも自分の財産になり、挑戦して良かったと感じています。本当は長期の留学に行きたかったのですが、コロナの影響や金銭的なこともあり行くことが出来ず残念に思うこともありましたが、文理学部にいたからこそ出来た経験があると思います。どこにいるからではなく、自分がその場所でどのように行動するのが大切なのだと感じました。

卒業後は、エンジニアとなり IT の会社に就職することを選びました。英語を使用しながら日本だけでなく、海外でも仕事をしたいと考えているからです。この仕事を選んだことも、学生生活で違うバックグラウンドや考えを持つ人と関わることの面白さに気付いたからであり、大学院での学生生活の中で幅広い分野の学問に触れ、興味を持ったことがきっかけであると思います。私に沢山の機会を与えて下さった文理学部の先生方に、とても感謝しております。今、在学している皆さんも、沢山の良いチャンスを逃さないように ambitious に過ごし、素敵な学生生活にして頂きたいです。



返っていきたいと思います。

近年生成系 AI の発達が目まぐるしく、多くの大学や学会でその利用を巡って議論がなされてきました。大学生の利用にとどまらず、研究者が AI を共著者として論文に名を連ねるといった事例もありました。このような生成系 AI の発展は今後も我々研究者の在り方に良い意味でも悪い意味でも大きく影響を及ぼしていくことになるでしょう。では、われわれ研究者は如何に生成系 AI の発展と向き合っていくべきなのでしょう。私個人としては、当たり前すぎることはありませんが、AI にできないことをひとつひとつ積み上げていくことが最も重要なのではないかと思います。では AI にできないこととはいったい何なのでしょう。それは「多くの人との交流」にあると思います。思えば、当時は学部生ではありましたが、Geoffrey Leech や Noam Chomsky の来日公演に始まり、これまで多くのイベントに参加していました。今では Zoom を利用して気軽に参加することも可能ですが、Chomsky の講演に関しては当日急遽、整理券が配付されるなど、参加するにも多くの苦勞が伴いました。その中で、当時学外で知り合った仲間と、実際にチョムスキーの講演で使用された原稿を共有し、それについて議論するなどして、お互いを高め合うことをしていたと思われます。そういった土壌があったためか、実際に院生や研究者になってからは、自身の研究発表に加え、学会や研究会で常々各地に直接赴いて情報を収集するようになった（そのため、英語史に関する Voicy のラジオ収録では、Ubiquitous な Monthly Muraoka と呼ばれることもあったか）と思います。そして今でも多くの先生方と日頃から直接やりとりをする中で、様々な情報共有が行われ、より良い分析の発展に繋がるよう日々努力をしております。

また、こういった口頭での情報共有以外にも未だにデータ化されていない情報や書籍などが多く存在します。その書籍が古ければ古いほど（著作権が切れたものを除く）、AI だけでなく人間でさえ入手は困難です。近年、毛利可信著『ジュニア英文典』や杉山忠一著『英文法詳解』などの貴重本が復刊したこともありますが、まだまだ入手困難な書籍は多く存在します。個人的には、そういった希少本のテキスト化を行い、自前のコーパスとして活用してきましたが、今後はより膨大なデータからひとつひとつの現象と向き合って、仮説を立て、それらを検証していかなければならないでしょう。そしてそれが、統語論、意味論、歴史言語学と様々な分野を射程に収めれば、その分より膨大なデータとなり、並々ならぬ勞力を伴うことにもなります。

今年も当たり前のように春が来て、早くも夏になりつつありますが、例え無謀であっても、常に AI の一步先を目指して、これまで以上に日々精進していきたいと思います。また研究者としてだけでなく、英文学科の助手として活動するにあたり、今後も多くの研究会員

の先生方にお世話になり、またご迷惑をおかけすることになることが予測されますが、これまでいただいた御恩が無駄にならないように、より一層尽力して参りたいと思います。



セブ語学留学の可能性について考える

日本大学スポーツ科学部准教授 秋葉 倫史

昨年 2 月～3 月に、日本大学令和 4 年度海外派遣研究員（短期 B）として、フィリピンのセブへ訪問する機会をいただきました。フィリピンの語学学校における英語教育と現地の英語の言語的特徴を観察することが主な目的でした。セブの語学留学・オンライン英会話は日本においてもかなり普及しているということ、また、本学部において、フィリピン人講師による英語の授業が行われており、その現地の語学学校への視察を受け入れてもらえたこと、そして、私自身がセブに複数回訪問したことがあるということが、セブを選択した理由です。この調査では、現地の施設を視察し、関係者からの聞き取りを行うなどのフィールドワークを実施しました。

セブの語学学校の多くは、朝から晩まで毎日英語の授業が展開される、いわゆるスパルタ方式を採用しています。また、その授業形態としては、マンツーマン授業が基本となっており、スパルタ方式と合わせて、英語に触れる時間をかなりの量確保することが可能です。英語教師のレベルは高く、発音に若干の母語の影響はあるものの、適切な発音・そして文法が意識されています。この背景には、フィリピンでは英会話教師は人気職ということもあり、高水準の（英語で行われる）教育を受けてきた教員が多いこと、また、学校内での研修が徹底していることがあげられます。

語学学校内及びその周辺エリアにおいて、設備が充実していることも特徴的でした。学内には自習室や談話室、食堂等があり、食事や洗濯などの生活に必要なものはすべて施設の中で完結します。また、カフェやトレーニングルーム、シアターといった娯楽施設も併設されています。これらはスパルタ式学習の精神的負荷を軽減させることや留学生の安全を確保するというねらいがあるようです。今回訪問した語学学校 SMEAG ベイドリーム 3 校では、開放的で豪華な屋外レストランが併設されていました。今後さらにマーケットやレジャー施設等を建設し、学校を中心

手術 (Cirugia de Urgência) が必要との判断であった。手術室に運ばれ、16:16 に医師二名と医学部生二名により手術が開始された。

手術は17:15に終了し、17:25に看護師から術後の処置を受け、併せて書類の記入など必要な手続きを済ませた。その後、17:40に手術を担当した医師と今後の治療についての相談を行った。その際に、数日以内にコインブラを離れる予定であるが可能か、それとも予定を変更しコインブラで治療を続ける必要があるのかどうかを確認したところ、「世界中どこであっても必要な治療は変わらないため、新たな滞在先の医療機関で二日毎に受診・処置を受けることが可能であれば計画を継続しても構わない」との回答であった。医師からは、今後の治療に必要な診断書と診療情報提供書を受け取り、派遣計画を続行することとなった。18:00にタクシーで病院を立ち、18:13に滞在先のホテルに戻ってきた。

3. 術後の経過

コインブラでは、滞在したホテルでシャワーや食事など生活の介助を受けながら静養した。当初の予定ではコインブラ (3月1日～3月4日) での滞在后、リスボン (3月4日～3月8日)、バンクーバー (3月8日～3月14日)、バルセロナ (3月15日～3月16日)、サラゴサ (3月16日～3月20日) と移動の予定であったため、所属学部の事務局に状況を伝え、併せて保険会社とも相談の上、滞在先毎に医療機関を受診する手配を進めた。

3月4日 (土) にリスボンに移動後、滞在したホテルで Ferreira da Cunha Saude より派遣された医師の往診と看護師からの処置を受けた。患部の回復状態が思わしくなく感染症も起こしているとの診断で内服薬を処方され、歩き回らないこと、ベッドで足の位置を高くして安静にしていること、もし歩く際でもゆっくりと短距離に限ることなどの指示を受けた。医師からはこの日の診察を踏まえた診断書と診療情報提供書を受け取った。3月6日 (月) に再び Ferreira da Cunha Saude より派遣された看護師からの処置を受け、次の移動先であるバンクーバーでの医療機関受診の手配と今後の治療スケジュールの確認をされた。3月7日 (火) に Ferreira da Cunha Saude の看護師からバンクーバーへの移動前に最後の処置を受けた。

3月8日 (水) にバンクーバーに移動し、3月9日 (木) に City Square Medical Center で診察と処置を受け、その後レントゲン撮影の予約手続きを進めた。医師からは当日の診察を踏まえた診断書と処方箋を受け取った。3月10日 (金) に Brooke Radiology Associates でレントゲン撮影を行い、3月13日 (月) に再び City Square Medical Centre で診察と処置を受けた。医師によると、「初めの手術から約2週間経ちこれ以上抜糸が遅れると患部が癒着してしまうため抜糸する

ことが望ましいが、現時点での傷の状態からすると今はまだ難しい。患部が膝の屈曲部であるため、どうしても傷の回復は遅れてしまう。もう少し経過を観察した上で一旦抜糸し、その後再度縫合する」との説明を受けた。翌日スペインに移動しなければならない事を伝え、「機内で傷が開く恐れがあるため勧められないが、リスクを理解した上でならば止めはしない。ただし、到着地で出来るだけ速やかに医療機関を受診すること」との説明を受け、診療情報提供書と処方箋を受け取った。

予定通り3月14日 (火) にバンクーバーを立ち、翌15日 (水) にバルセロナからスペインに入国したものの、受け入れ先の医療機関が中々見つからず、3月16日 (木) の夕刻になってようやく受け入れ先が見つかり、サラゴサの Hospital Quirónsalud Zaragoza を受診した。ここで抜糸を済ませ、この日の診療情報提供書と処方箋を受け取った。

日本に帰国後の4月5日 (水) に診察を受けた際の医師の見立てによると、患部が壊死してはいないため血流は通っていると判断できるが、一旦神経や血管が断裂しているため、感覚麻痺から回復するまでに半年から1年程度は必要である。経過を観察しながら状態により再度手術を検討するとのことであった。

2024年5月時点で受傷から約1年が経ち、全体として緩やかな回復傾向にあり通常の歩行も可能であるものの、依然として膝をつくことは難しく患部の感覚も戻っていない。現在も経過の観察を継続中である。

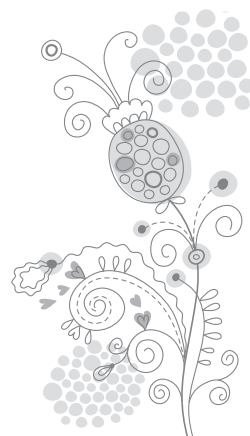
4. おわりに

今回の派遣では突発的な事情により、当初の予定には含まれていなかったポルトガル、カナダ、スペインの医療機関を利用することとなった。その中で一番印象に残ったことは、欧州における看護師など医師以外の医療従事者 (コ・メディカル) の権限と地位の高さである。ポルトガルやスペインでは、医師からの指示がなくとも看護師が独立してある程度の判断を下したり、日本であれば医師が担うであろう一部の処置も看護師が行うなど、医師以外の医療従事者の権限や地位が非常に高いことが伺えた。

日本では、2009年に厚生労働省が「チーム医療を推進するため、日本の実情に即した医師と看護師等との協働・連携の在り方等について検討を行う」ことを目的に、「チーム医療の推進による検討会」(座長: 永井良三東京大学大学院教授) を開催して以降、患者に対する適切な治療のためにコ・メディカルの活用を促進することを目指し、また医学部、薬学部、看護学部など医療系学部においてもこの方針の基での教育が行われている。今回の海外派遣で生じた一連の出来事により、厚労省、医療系学部、医療業界が目指しているチーム医療実践の一端を目の当たりにした。また、治療に要した費用は全て海外旅行保険で賄われた

1週間でしたが、楽しいだけでなく、大変だった出来事もありました。この1週間で2回もプレゼンテーションをする機会がありました。私はプレゼンテーションする機会が今までほとんどなく、現地の高校生に向けて20分間自分の国について紹介するプレゼンテーションを作れと前日に言われたときは本当に焦りました。夜もほとんど寝ずに作成し、無事に終わったときには達成感が非常にありました。現地の高校生も日本語を学んでいやすくプレゼンテーションが盛り上がってくれて嬉しかったです。また、最終日に学んだことをプレゼンテーションするときは周りの人のレベルが高く驚きました。もっとよい発表ができるように頑張ろうと思います。今回のプログラムでは初めて海外の友達ができ、異国の考え方や文化、宗教に触れることができました。最終日には帰りたくなるほど良い友達と出会うことができました。そして英語を話す勇気をくれました。今後の英語学習のモチベーションにもつながったと思います。

最後に、このような機会を下さった先生方、トラブルに見舞われたときにたくさん支えてくれた友達、サポーターの職員の方々に感謝申し上げます。素晴らしいプログラムに参加できて挑戦する大切さや、一人で飛び込む勇気をもらうことができました。今年もぜひ参加をしたいと考えています。これからもより一層英語学習について励んでいきたいと思っています。



《研究室だより》

● 2023年度(令和5年度)行事

◆ 第49回英語弁論大会(文理学部主催)

11月4日(土)文理学部3号館4階3407教室において、第49回文理学部英語弁論大会が開催されました。結果は以下のとおりです。(学年は当時のもの)

- 1位 閻 淑寧 (教育学科3年)
2位 伏屋 少耶子 (社会学科1年)
3位 田原 希優 (英文学科3年)

◆ 大学院特別講義

令和5年度の大学院特別講義は以下のとおり行なわれました。

【英語学分野】

- 日時 10月30日(月)4・5時限、
11月1日(水)4・5時限
講師 安井 泉(筑波大学名誉教授・
日本リスキャロル協会会長)

[講義題目] 英文法は文学を支え、文学は英文法を豊潤にする

【英文学分野】

- 日時 11月13日(月)2・3限
講師 Laurence Williams(上智大学外国語学部
英語学科准教授)

- [講義題目] ① Introduction to Imperial British
Travel Writing: Reading the Robinson
Crusoe Trilogy
② Nineteenth-Century British Travel
Writing on Japan and Isabella Bird's
Unbeaten Tracks

【米文学分野】

- 日時 12月5日(火)2・3・4・5限
講師 巽 孝之(慶應義塾名誉教授・
慶應義塾ニューヨーク学院長)

[講義題目] アメリカ文学思想史

◆ 卒業式・修了式

3月25日(月)午前11時より、日本武道館にて卒業式が挙行されました。また、同日13時30分より、文理学部3号館3206教室にて、学位記伝達式が行われました。本年度は学部卒業生140名、大学院博士前期課程修了者3名でした(3月25日付)。

優等賞は木部拓海さん、学部長賞は吉永陽菜さんでした。

◆ 卒業論文・修士論文

令和5年度に提出された卒業論文の分野・作家の内訳および修士論文のタイトルは以下のとおりです。

(卒業論文 分野・作家内訳一覧)

(カッコ内の数字は人数)

【英文学】(40)

- Austen, Jane (2)
Barrie, J. M. (1)
Bronte, Emily (3)
Carroll, Lewis (2)
Chaucer, Geoffrey (5)
Christie, Agatha (1)
Doyle, Conan (1)
Hornby, Nick (1)
Ishiguro, Kazuo (9)
Lewis, C. S. (1)
Orwell, George (2)
Shakespeare, William (9)
Shelly, Mary (1)
Travers, P. L. (1)
Wilde, Oscar (1)

【米文学】(17)

- Capote, Truman (1)
Fitzgerald, Francis Scott (5)
Gilman, Charlotte Perkins (1)
Hemingway, Ernest (2)
King, Stephen (1)
Melville, Herman (2)
Salinger, J.D. (2)
Steinbeck, John (2)
Weisberger, Lauren (1)

【英語学】(40)

- 意味論 (9)
対照言語学 (1)
英語史 (3)
コーパス言語学 (1)
現代英文法・語法 (6)
英語教育 (15)
コミュニケーション (1)
語用論 (1)
言語学習 (3)

【映画監督】(4)

Zemeckis, Robert (1)
Cameron, James (1)
Chazelle, Damien (1)
Gluck, Will (1)

【その他】(2)

村上春樹(英訳) (1)
Shakur, Tupac Amaru (1)

〈修士論文 タイトル一覧〉

荻野 菜加 Christianity, Romanticism, and the Power of the Female Imagination in the *Ann of Green Gables Series*
柏木いずみ Family, Faith, and Kindness in Elizabeth Gaskell's *North and South: A Study and Motherhood*
日向 眞緒 The Witches in *Macbeth*: Focusing on Ambiguous Words and Destroyed Order

● 2024 年度(令和 6 年度) 行事

◆入学式・開講式

4月2日(火)午後1時より文理学部にて開講式が行なわれました。また、入学式が4月8日(月)午前9時より日本武道館にて行なわれました。英文学科・英文学専攻への入学者数は次のとおりです。

学部入学者	143名
大学院博士前期課程入学者	6名
大学院博士後期課程入学者	2名

◆在籍者数

学部	2年生	150名
	3年生	144名
	4年生	132名
大学院博士前期課程		7名
博士後期課程		3名

◆第50回英語弁論大会(文理学部主催)

令和6年11月3日(日)午前11時より、文理学部(教室等未定)にて、第50回文理学部英語弁論大会が実施予定です。

◆大学院特別講義のお知らせ

英文学、米文学、英語学の各分野の著名な先生方による大学院特別講義が、令和6年度も行なわれる予定です。詳細は英文学科ホームページでお知らせします。

《事務局だより》

●月例会報告

2023年度の月例会は以下のとおり行われました。

4月 研究発表(2023年4月15日)

司会 塚本 聡(文理学部教授)
発表

1. 条件文における be to の意味機能について
岡 麟太郎(博士後期課程3年)
2. 『鐘の音』に見る無知と貧困
大前 義幸(岩手県立大学宮古短期大学部准教授)

5月 英文学シンポジウム(2023年5月20日)

[テーマ] 戦争とシェイクスピア
コーディネーター 松山 博樹(法学部准教授)
発表

1. 『ヘンリー六世第三部』と戦争
赤部 美希(文理学部講師)
2. 『リチャード三世』と戦争
松山 博樹(法学部准教授)
3. 『オセロー』と戦争
堤 裕美子(佐野日本大学短期大学准教授)

6月 特別講演(2023年6月10日)

司会 高橋 利明(文理学部教授)
講演者 西谷 拓哉(神戸大学国際文化学研究所教授)
演題 メルヴィルの創作意識と小説のモダニティ

10月 英語教育シンポジウム(2023年10月28日)

[テーマ] 英語教師の狙いや工夫～学習者に響く授業づくり～
コーディネーター 小澤 賢司(通信教育部准教授)
発表

1. Writingを通して鍛えるアウトプット力
小澤 賢司(通信教育部准教授)
2. 生徒観に基づいた高校の英語教育における実践例～教材、カリキュラム、ICTツールをめぐって～
加藤 寛典(日本大学鶴ヶ丘高等学校教諭)
3. 英語力と人間性を育む授業
江村 直人(横浜翠陵中学・高等学校教諭)

11月 研究発表(2023年11月25日)

司会 飯田 啓治朗(文理学部教授)
発表

1. 都市の無名性という名のミステリー小説
—ウィリアム・アイリッシュの「消えた花嫁」を読む—
堀切 大史(文理学部准教授)

2. A Label is the Property of an Edge rather than a Node

賀美 真之介 (文理学部講師)

12月 2023年度学術研究発表会・総会 (2023年12月9日)

【学術研究発表会 (語学の部)】

司会 黒滝 真理子 (法学部教授)

発表

1. 証拠性の観点から見た知覚動詞の受動態と原形不定詞の意味的非整合性について

村岡 宗一郎 (文理学部助手)

2. could not と was/were not able to の試行の有無

島本 慎一朗 (文理学部講師)

【学術研究発表会 (文学の部)】

司会 宗形 賢二 (国際関係学部特任教授)

[最終講義]

Melville, Hawthorne, and the Utopias of the Sea and the Land: On Ishmael's and Zenobia's "hand"

高橋 利明 (文理学部教授)

● 2023・2024年度運営委員

会長 吉良 文孝

副会長 隅田 朗彦

- | | |
|--------------|------------|
| ○秋山 孝信 | 渋木 義夫 |
| 新井 英夫 | ○杉本 宏昭 |
| ○飯田啓治朗 | ○鈴木 孝 |
| ○一條 祐哉 (会計) | ○隅田 朗彦 |
| 今井 真吾 | 武中誠二郎 |
| 今滝 暢子 | ○田中 竹史 |
| 小澤 賢司 | ○M.K. チルトン |
| 加藤 寛典 (会計監査) | 塚本 聡 |
| 上滝 圭介 | ○保坂 道雄 |
| 川崎 和基 | ○堀切 大史 |
| ○閑田 朋子 | ○前島 洋平 |
| ○吉良 文孝 | ○牧野 理英 |
| 黒澤 隆司 | 松崎 祐介 |
| 黒滝真理子 | 山岡 洋 |

(○印は常任委員)

[任期は2023年4月より2025年3月まで]

●日本大学英文学会 2022年度決算額

2022年度決算額	
前年度からの繰越金	¥2,837,613
収入の部	
会費	¥607,500
研究会員	¥528,000
同窓会員	¥66,000
学生会員 (新入生)	¥13,500
雑収入	¥11
補助金	¥20,000
収入合計	¥627,511
支出の部	
論叢出版費	¥198,330
会員名簿出版費	¥0
学会通信出版費	¥87,890
通信費	¥105,237
大会費	¥0
大会懇親会補填費	¥0
講演謝礼費	¥51,280
大会	¥0
月例会	¥0
講演会	¥0
他学会年会費	¥32,048
日本英文学会	¥8,262
日本アメリカ文学会	¥9,262
日本英語学会	¥7,262
英語教育関連学会	¥7,262
用品費	¥19,965
会合費	¥6,736
交通費	¥0
月例会雑費	¥0
ホームカミングデー費	¥0
事務運営費	¥330
奨学制度関連費	¥3,000
査読料	¥15,495
予備費	¥0
支出合計	¥520,311
日本大学英文学会 基金への繰入	¥0
日本大学英文学会 基金への繰入後の合計	¥520,311
次年度への繰越金	¥2,944,813

●お知らせ

◆月例会予定

2024年10月以降の月例会の予定は以下のとおりです。なお、予定は変更となることもございます。

詳細につきましては、メールおよび本学会ホームページにてご案内いたします。

- 10月 英語学シンポジウム(2024年10月26日)
- 11月 研究発表(2024年11月30日)
- 12月 2024年度学術研究発表会・総会(2024年12月14日)

◆研究発表者募集

当学会では、月例会・年次大会の発表者を募集しております。発表をご希望の方は、以下の情報を事務局までお寄せください。なお、検討の結果、ご希望に添えない場合がございます。

1. 氏名
2. 住所・電話番号・メールアドレス
3. 所属
4. 発表希望年月
5. 発表題目
6. 要旨(日本語400字以内、英語200語以内)

◆『英文学論叢』第73巻 原稿募集

日本大学英文学会機関誌『英文学論叢』第73巻(2025年3月発行予定)の原稿を募集いたします。投稿をご希望の方は、『英文学論叢』第72巻(2024年3月発行)巻末の投稿規定に沿って、奮ってご投稿下さい。締切日は2024年9月30日(月)(必着)です。

◆会員情報の登録・変更について

会員各位の情報更新をメールにて受け付けております。メールアドレス、住所、その他の会員情報の登録・変更をご希望の方は、事務局までお知らせください。

◆会費納入のお願い

2023年度の年会費(研究会費4,000円、同窓会員1,000円)を未納の方は、郵便振込で納入いただきますようお願いいたします。2024年度の年会費につきましては、2024年11月出版予定の「英文学会通信」第122号送付時に振込用紙を同封いたします。

なお2018年度より、(年次大会受付含む)事務局での現金による年会費納入はお取扱いできなくなりました。年会費納入には、お手数ですが、郵便振込をご利用いただきますようお願い申し上げます。

口座番号：00140-3-27474
加入者名：日本大学英文学会



